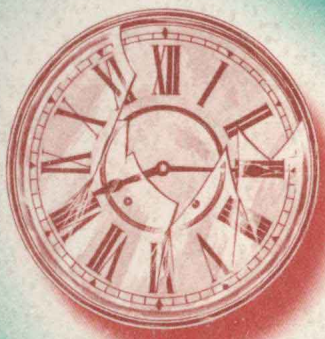
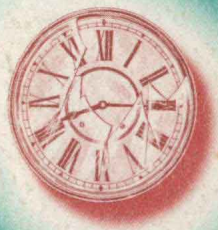
平和への願いをこめて
④ 広島・被爆その後編
創価学会婦人平和委員会編

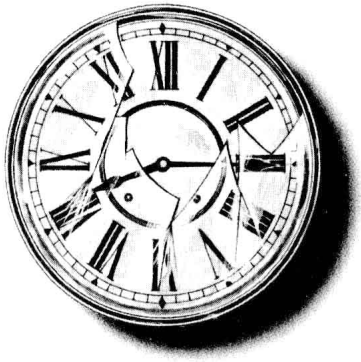


ヒロシマの心・母の祈り

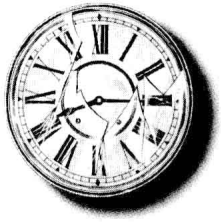
あれから三十七年
限りない苦悩の日々を生きぬいた
母たちがさけぶ
平和のこころ——



平和への願いをこめて
❹広島・被爆その後編
創価学会婦人平和委員会編



ヒロシマの心・母の祈り



〈シリーズ〉平和への願いをこめて④
広島・被爆その後編
ヒロシマの心・母の祈り
昭和五十七年六月七日　初版第一刷発行

編　者　創価学会婦人平和委員会
発行人　栗生一郎
発行所　第三文明社
東京都千代田区猿楽町二―五―四
電話(二九四)八七三一(代)
振替・東京　五―一一七八一三
印刷所　図書印刷株式会社
ISBN 4-476-07504-5
＊乱丁・落丁本はお取り替えいたします
Printed in Japan

原爆投下の翌春
異常に頭の小さな子どもが生まれた
五年後、米人医師はそれが
原爆の放射能による障害であることを認めた
知恵の遅れた頭脳、貧弱な四肢、不健康な内臓
全国で四五人の存在が確認されている
彼ら胎内被爆小頭症
あの原爆で完全に閉ざされた彼らの青春を返せ
われわれは、この子を自らの存在の証しとして
あくまで戦争犯罪を糾弾し
核兵器を生命をかけて否定する
二六年後の夏
体内被爆小頭児と父母の集り　きのこ会

相生橋土手より
原爆ドームをのぞむ
畠中百合子さんとその家族
昭和三十年八月六日
右端が百合子さん

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

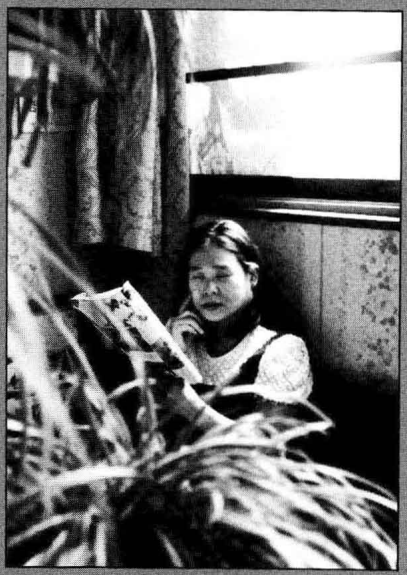
上・昭和29年５月当時／右上・同じ頃、父国三さんと／右下・昭和30年２月、母敬恵さんと／下・昭和32年４月当時

畠中百合子さん
昭和二十一年二月十四日生まれ
爆心より七三〇メートルの地で胎内被爆
重度の小頭症――
生活のいっさいを
母・敬恵さん(故人)に見守られながら育つ――

妹真由美さんらと
故き母の墓参に――
昭和五十六年一月

墓に耳を傾け
母さんの声が聴こえる
かのように訴える

父の営む小さな理髪店の片隅で
週刊誌の写真を飽かずながめる
内容は、まったくわかっていない、という



母なきあと
「百合子さんを励ます会」の有志たちが
彼女のために雑誌を届け、彼女を見守っている

まえがき

今日の核兵器の脅威は、三十七年前、広島・長崎に投下された原爆の破壊力に比べ、想像を絶するものがあります。現在、保有されている核弾頭の総爆発力を合わせたものは、広島型の百万発分以上にも相当するとされています。

かつて核は「使えない兵器」として、核抑止論がまことしやかに論じられていました。ところが戦域核を欧州大陸に限定しようとする動きや中性子爆弾の開発によって「使えない兵器」から「使える兵器」として公然と戦略理論が練られるようになりました。

ようやく、ヨーロッパやアメリカにおいても危機感が深まり、第二回国連軍縮特別総会を前に、核廃絶や核軍縮を求める運動が各地で高まってきております。国連軍縮特別総会において、実りある対応策が講じられることを期待すると共に、この反核のうねりがさらに大きなものになっていくことを心より願ってやみません。

ところで創価学会においては昭和三十二年九月八日、戸田第二代会長が横浜の三ツ沢競技場において、五万人の観衆を前に、歴史的な「原水爆禁止宣言」を行いました。

以来、二十数年、創価学会は理由のいかんによらず、いずれの国の核兵器も廃絶することを訴

え続けてまいりました。歴代の会長、とりわけ池田第三代会長は人道的立場から世界各国を歴訪し、平和のための民間外交を展開してまいりました。

今回、創価学会婦人平和委員会では「平和への願いをこめて」シリーズ第四巻として、広島・被爆その後編『ヒロシマの心・母の祈り』を刊行する運びとなりました。今日ほど唯一の被爆国として、被爆体験を継承し、その悲惨さを世界に訴えていくことが切実に要請される時はありません。

昭和二十年八月六日、午前八時十五分、原爆の閃光は瞬時に、夫を、わが子を、母を、そして友を奪いました。幸い生き残れた人々にとっても、この三十七年間は苛酷な宿命と放射能による後遺症との戦いの連続でした。

年々、被爆者の数は減り、また老齢化はいちじるしく、しかも健康が悪化してきています。〝今こそ被爆者の声を結集しなければ……〟そんな思いの中で第四巻の計画は練られました。具体的には、広島編纂グループが中心となって、被爆当時の模様より、むしろ生と死のギリギリの極限状況をさまよい、生きぬいた被爆者の方達のその後の課せられた苦悩の人生に比重をおいて手記をまとめました。

この生々しい被爆体験の前では、いかなる人でも戦争を肯定したり美化することはできません。戦争をおこすのは人間です。戦争をおこさない努力をできるのも私達人間です。

あの日を侵食し、風化し、変形しないために、私達婦人に何が出来るのか、そうした視点をふまえ、第四巻では広島女子大学学長・今堀誠二先生、平和記念資料館の高橋昭博館長、山口放送ディレクターの磯野恭子さん等に貴重な御意見をいただきました。

戦後生まれの〝戦争を知らない世代〟が半数を超えた今日、本書が戦争体験を語れない若い親たちの一助ともなれば、また一人でも多くの人が本書にふれることによって、平和のために次の行動につき動かされることになれば、これ以上の喜びはありません。

なお、創価学会婦人平和委員会では、昭和五十五年十二月に発足以来、東京で七回、関西で一回の「婦人と平和を考える」講演会を開催してまいりました。また、戦争体験証言集の出版として、第一巻・引揚げ編『あの星の下に』第二巻・従軍看護婦編『白衣を紅に染めて』第三巻・戦後生活（関西）編『雑草のうた』を発刊し、多大の反響をよびました。

今後もこのシリーズは地道に巻を重ねてまいります。読者の皆様の貴重な御意見や体験を委員会宛に数多くお寄せいただけますことをお願い致します。

最後に、出版にあたりまして執筆、編集に限りない御尽力をいただきました多くの同志の皆様方、および第三文明社の方々に、心より御礼申し上げます。

昭和五十七年五月

創価学会婦人平和委員会

委員長　秋　山　栄　子

もくじ

まえがき

手記

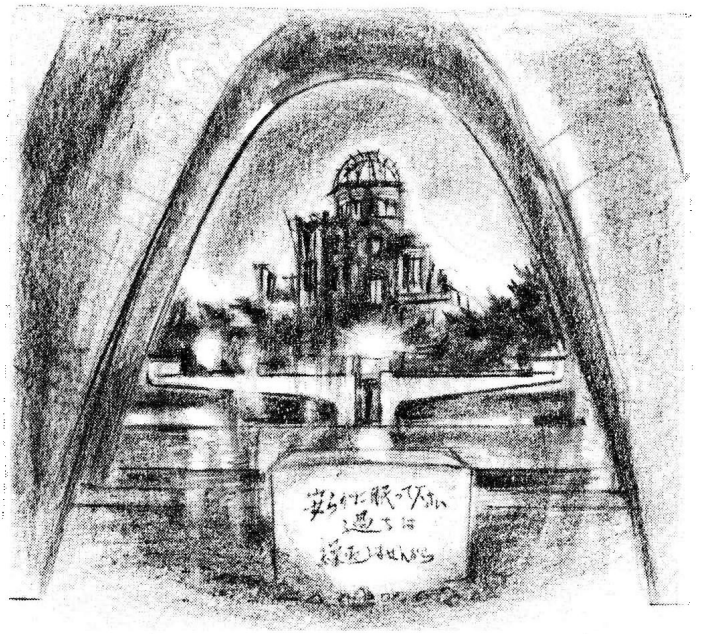
原爆は悲しい……岩村ミサ 13
娘たちよ……竹内ヤス 21
五百四十余名の教え子を失って……上野ナツ子 34
母の細腕で九人の子を……野間美久代 43
二合のヒマシ油……平田サトメ 55
悲しい夢……江木キクノ 64
死んだら〝原爆〟を切り刻んで……前寺シスエ 76
あの時、かんづめ食べなきゃあ……天野静香 84
業火の中をくぐりぬけて……守下フミコ 92
低空の機銃掃射……植杉静子 102
踏みにじられたナイチンゲール精神……多田キクエ 117
平和な島・似島が一転して地獄の島に……久保千恵 126

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

引き裂かれた家族……山本清子 133
お父さん、熱かったでしょう……河野弘子 146
鏡に写った真っ赤な顔……金光悦子 156
果たせなかった約束……山田信子 163
ケロイドに奪われた私の青春……植生富美子 176
ピカの日——私は「胎内」にいた……篠原美保子 189
小頭症児をかかえたわが母の記録……吉田真由美 198
《座談会》ヒロシマの心・母の祈り……今堀誠二／松本ナツ子／磯野恭子／徳野京子 215
《解説》ヒロシマの平和への心……高橋昭博 235
あとがき
編集後記

装幀・高久省三
表紙イラスト・前田寛
挿画・荒野予而栄

手記



原爆は悲しい

岩村（いわむら）ミサ（81歳）
広島市中区在住

◇結婚して山口より広島へ来ていて、出汐町（爆心地より三キロ）にて、四十四歳の時被爆。当時、アメリカへ行っていた主人は行方不明になり、そのまま現在に至る。体の調子が悪くなり山口の実家にて養生中に再婚。その主人も亡くなり、現在は身よりも一人もなく、長崎、広島の原爆病院入院後、現在の養護ホームに、五十一年より入る。

原爆は悲しい。悲しいねェ。

私は、今年で八十一歳になるけど、身寄りは、もう誰もおらんのよ。本当に一人ぼっちよ……。小さい頃から〝賦〟が悪かったんじゃね。

生まれは山口でネ、家には兄が二人と姉が一人、ほいで母親の五人ぐらし。父親は、私が三歳

の時、病気で死んだんよ。

その私が、何で広島まで、わざわざ山口から広島まで来たかいうたら——、近所の人の世話で結婚したんよ。主人になる人は、土地の売買をする人で、広島に住んどるいうだけで、顔も知らんのに広島へ出てきたんよ。私が二十五歳の時じゃった。ほいで、次の年には「アメリカへ土地を買いに行く」言うて、アンタ、アメリカへ、仲間と一緒に行ってしもうた。私しゃね、その日横浜まで見送って、主人は船で出て行ったんよ。

毎日毎日、待っとった。迎えに来てくれるのを……。いつまで待っても帰って来んし、そのうち戦争が激しゅうなってくるし、私も一人で生活せんといけんでしょ、じゃから働きに出るようになったの。

出汐町に、大きな被服工場があって、そこで軍人さん用の服を縫うんよ。時には、血のついた服を洗うて、つくろったりしたものよ。

昔の女は、待つことしか出来んから、私しゃ、ずっと主人の帰ってくるのを待っとった。

そーよ、あの二十年の、あの日——。

私しゃ、四十四歳になったばかりじゃった。

あの日は、暑い暑い日じゃった。

いつもと同じように、八時になったから、皆ミシンにむこうとった。私もミシンの前に座っと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com